

人々の命を支えた山の湧き水 ～入谷地区 稲荷林～



▲入谷地区童子下字大羅に昔からこんこんと湧き続ける稲荷林の清水。

震災直後から約1カ月間、通常の3倍の水量が湧出し、断水で水に不自由していた住民たちを支え続けた。

写真提供 南三陸町観光協会

内陸の入谷地区は深い山からの湧き水に恵まれてきた。そのひとつ、^{どうじたあぎだい}童子下字大羅の集落の奥に、^{いなりばやし}稲荷林と呼ばれて来た湧き水があり、古くから地域住民に守られてきた。

長い間断水が続き、すべての水道が復旧したのは2011（平成23）年8月だった。住民たちが水に困っていたその期間、稲荷林の湧き水では不思議なことが起こった。同年3月11日の大地震で、通常の3倍もの大量の水が湧き出るようになったのだ。大羅の人々は、その水を避難所などに供給し続けた。家屋の流失を逃れた高台の家々の住民たちも続々と水を汲みにやって来た。

自衛隊などの支援により給水態勢がほぼ整った同年4月7日の夜、激しい余震が起こった。その余震をきっかけに、稲荷林の湧き水は、何事もなかったかのように以前の水量に戻った。

住民たちを救った命の水は、今も静かに湧き続けている。